一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「下塗りをおろそかにしては、あつみのある、ぼってりとした色は出ません」[1]

谷正利はそんな表現で、下塗りの大切なことを強調していました。谷は飛騨高山に住む、春慶塗りの名手です。

使えば使うほど底づやの出てくる漆器を作るには、下塗りが大切です。まず豆汁を塗って下地を作る。ついで漆の下塗りをする。二カ月ほど寝かせてからまた下塗りをする。五度も六度も下塗りを繰り返す。そういう丁寧な仕事のあとに、上塗りをします。あのやや黄みをおびた琥珀の色つやはそうして生まれるのです。

文章でも、同じことがいえるのではないでしょうか。

〔　1　〕

土のうえに直径一メートルの円を描き、その円内で円錐状の穴を掘ります。次に直径五メートルの円を描いて穴を掘ります。どちらがより深く穴を掘ることができるか。いうまでもなく、円が大きければ大きいほど、穴も深くなります。[2]

ものを書くときは準備が大切です。小さな円を描いたのでは、それだけのもので終わってしまいます。はじめから思い切って広い円を描いて準備をすれば、内容の深いものが生まれます。

と、言葉でいうのは簡単ですが、土を掘れば石ころもある。木の根っこもある。そういうものと根気よく格闘しなければならない。人はともすれば易きにつきがちです。つい小さな穴ですまそうとする。

しかし小さな穴でごまかした文章は、結局はそれだけのものです。「一冊の本」という題で文章を書く。本屋さんで一冊買ってきてぱらぱらとめくって、それだけで書き始めても小器用な人ならある程度のことは書けるでしょう。

〔　2　〕

別の人は、昔から大好きだった本のことを書く。五回も六回も読んだ本です。十年前に読んだときと今度あらためて読んだときの違いなんかを書く。たとえ表現がまずくても、深いものが書けるはずです。うすっぺらでも小器用にまとめられた文章がいいか。多少たどたどしくても深みのある文章がいいか。私はためらうことなく、後者を選びます。

〔　3　〕

新聞社の試験を受けたいという若い人に会うと、私はこういいます。「日記をつけなさい。踊りのシュギョウをする人は、稽古を一日怠るだけで後戻りをするといいます。書くクンレンも同じです。なんでもいいからその日のことを書く、というクンレンを己に課しなさい。たのしんで書けるようになればしめたものです」

作家の池波正太郎は「食べもの日記」を欠かさなかったそうです。何十年も、毎日、食べたものを書きとめておいた、というからソウトウなものです。

一、トウフの味噌汁、飯、納豆、香の物（ナス）

二、牛肉アミ焼き、冷酒、サワラの塩焼き

三、きつねうどん

という具合です。一、二、三というのは池波流の表現で、第一食、第二食、第三食の意味です。おいしかった料理にはしるしをつけておく。レストランで食べたときは場所と同席者の名前を書いておく。

鬼平の話にせよ、仕掛人・梅安の話にせよ、よく食べものの話がでてきます。作品にトウジョウする食べものはみな、いかにもうまそうで、季節のこまやかな味がでています。「食べもの日記」のせいでしょう。

〔　4　〕

「冬に深川の家へ遊びに行くと、三井さんは長火鉢に土鍋をかけ、大根を煮た。

土鍋の中には昆布を敷いたのみだが、厚く輪切りにした大根は、妻君の故郷からわざわざ取り寄せる尾張大根で、これを気長く煮る。

煮えあがるまでは、これも三井さん手製のイカの塩辛で酒をのむ。柚子の香りのする、うまい塩辛だった。

大根が煮あがる寸前に、三井老人は鍋の中へ少量の塩と酒を振り込む。

そして、大根を皿へ移し、醤油を二、三滴落としただけで口へ運ぶ。

大根を噛んだ瞬間に、

『む……』

いかにもうまそうな唸り声をあげたものだが、若い私たちには、まだ、大根の味がわからなかった」

なんということはない。大根の輪切りにしたやつを煮るだけの話ですが、池波の手になると、煮あがったばかりの大根をすぐにでも食べてみたいという気になる。こういうさりげない食べもののビョウシャも、日ごろから広い円を描いているからこそ自然に生まれてくるのでしょう。

〔　5　〕

作家の宇野千代は、ある日、天狗屋久吉という阿波の人形師に会いました。八十すぎの人でした。彼は縁側に坐って、一日中、ノミを使って木を刻みます。「十六の年から、こうして毎日、木を刻んでましたのや」という人形師の言葉を聴いて、宇野は思います。そうだ、毎日、書くのだ、と。

宇野が非凡なのは、思っただけではなく、それを実行したことです。

「書けるときに書き、書けないときには休むと言ふのではない。書けない、と思ふときにも、机の前に坐るのだ。すると、ついさつきまで、今日は一字も書けない、と思つた筈なのに、ほんの少し、行く手が見えるやうな気がするから不思議である」

人形師が毎日縁側に坐るように、毎日、必ず、机の前に坐る、そうすればおのずから文章が書ける、と宇野はいっています。

（辰濃和男『文章の書き方』）

（解答について、語群より選択の場合は、符号で答えなさい。また記述の場合、とくに指示のないときは、句読点も字数に入ります。）

問一　文中の═══部ア～オを漢字に改めなさい。

問二　次の文の入る箇所を、〔　〕部1～5の番号で答えなさい。

A　広い円を描くことの実際的な方法に、たとえば日記があります。

B　別の言葉でいえば、こういうことです。

C　こんな文章があります。

問三　═══部1はどのような色のことか文中の言葉を使って答えなさい。

問四　═══部2の「大きな(ア)「円」、(イ)「穴」」は本文の主題にそくしていえばそれぞれなにの比喩か。文中の漢字二字で答えなさい。

問五　═══部2の「円」に相当するものを三つ選びなさい。

ア　何回もうるしの下塗りをする

イ　食べもの日記をつける

ウ　土鍋に昆布を敷く

エ　大根を長時間煮る

オ　毎日ノミを使う

カ　気のむいたとき机に座る

キ　小器用にまとめた文章を書く

ク　試験を何回もうける

問六　宇野千代は阿波の人形師の(ア)どのような行為から(イ)何を学んだのか。文中の言葉を使って答えなさい。

問七　筆者は日記を書くことをすすめている。その理由を、文中より二五字以内で抜き出しなさい。

次の四字の熟語について、下の（　）の意味を考え、□に補う漢字を記せ。

ⓐ 新□代□（新旧が交代し、たえず新しくなるさま）
ⓑ 急□□下（事情が突然変わって、事のきまりが急に片付くたとえ）
ⓒ □和雷□（自分の主義主張や信念をもたず、人の言動につられて行動すること）
ⓓ 不□□党（一党一派に組しないたとえ）
ⓔ 虚□坦□（無心の状態で、何の先入観もなく、わだかまりのない素直な心）
ⓕ 公□□私（心が正しく依怙贔屓がなく、私心がないこと）
ⓖ 自画□□（自分で自分のことをほめそやすこと）
ⓗ 旧態□□（古いものが進歩しないたとえ）
ⓘ 優□不□（ぐずぐずしていて、なかなか決断しないこと）
ⓙ 有名□□（名前だけで用を足さないもののたとえ）
ⓚ □離□裂（筋が一貫せず、何を言いたいのかわからないたとえ）
ⓛ 竜□蛇□（初めは立派だが、終わりが駄目なことのたとえ）
ⓜ □意□妙（その場にうまく適応し、すばやく機転をきかすさま）
ⓝ 我□引□（自分に都合よく取り計らうこと）
ⓞ 自□□得（自分のした悪行の報いが自分に返ってくること）
ⓟ 臨□□変（その場に最もよく合った上手なやり方をすること）
ⓠ □刀□入（遠回しにせずに、すぐ問題の中心にふれていくこと）

次の意味にあてはまる諺を、あとからそれぞれ選び、その番号で答えよ。

ⓐ 思いがけない出来事にびっくりする。
ⓑ 本当の目的は他のところにある。
ⓒ 他人のことにばかり気をとられ、自分にかまっていられない。
ⓓ 無理な望み。
ⓔ 物事はすべて専門家に任せるのがよい。
ⓕ 利欲に迷う者は物の道理をわきまえない。
ⓖ 非常に都合がよい。
ⓗ 物事にうかつである。
ⓘ 人の見ていない所でしても意味がない。
ⓙ すぐれた者のいないところで、つまらない者がはばをきかす。

① 木に縁りて魚を求む　② わたりに舟
③ 餅は餅屋　④ 寝耳に水
⑤ 鳥なき里のこうもり　⑥ 芋の煮えたの御存知ないか
⑦ 敵は本能寺　⑧ 縁の下の舞い
⑨ 鹿を逐う者は山を見ず　⑩ 紺屋の白ばかま